



「生きた化石」の味

生命の海科学館の学芸員、相澤です。今月より「生命の海から」を隔月で担当することになりました。どうぞよろしくお願います。

今回はタイトルバックで泳いでいる魚、シーラカンズについて。「生きた化石」とも呼ばれているこの古代魚が南アフリカ沖で発見されたのは1938年、今から70年ほど前のことです。それまでは化石でしか知られていない魚でした。遙か昔に絶滅したと思われていた生物が突如発見されたわけですから、「生きた恐竜が現れたも同然」と仰天した当時の学者の気持ちもわかります。

これまでに捕獲されたシーラカンスはわずか200匹ほど。生きた個体の飼育もできず、まだまだ謎の

多い生き物です。ただ、この魚味はとてままずいということだけはわかっています。「歯ブラシを噛んでいるような食感」と記録されているほどです。地元では「ゴンベツサ」と呼ばれていますが、「食べることができない」という意味です。実はこの「ままずさ」が、長い間絶滅もせず生き残れた理由なのかもしれません。おいしいが故に、人間に捕り尽くされ絶滅した生き物も数多くいるからです。

科学館にはシーラカンズの実物化石が2点展示してあります。保存状態も大変よく、その特徴であるヒレがきれいに残っています。この魚が地球上に現れたのはおよそ4億年前。化石の前で、悠久の時間の流れとともに、その身を敵から守った？味のまずさにも思いを馳せてみてください。

私たち科学館の職員は、シーラカンズをはじめ素晴らしい所蔵品をどのように展示し、紹介していくか、どうしたらもっと科学館に足を向けてもらえるか、日々試行錯誤しています。この「生命の海から」をきっかけに、もっと科学館に興味をもっていただければ幸いです。



当館所蔵のシーラカンズの種類、「リス」の化石です。約1億5000万年前の地層(ドイツ南部)から発見されました。全長およそ60cm、特徴的な筋肉質のヒレが残っています。



今からちょうど400年前の慶長17年(1612)、蒲郡にとつて重大な出来事がありました。かつて竹谷地域のお殿様であり、このころ吉田藩(現在の豊橋市付近)3万石の大名になっていた竹谷松平氏の当主・忠清が、この年の4月に急病で亡くなったのです。

この時、忠清は28歳。慶長15年に父の家清が45歳で亡くなって跡目を継いでからまだ1年半ほどしか経っておらず、大変困ったことに、忠清の跡目を継いでくれる男子がいまいませんでした。

江戸時代の初めごろは、跡継ぎがきちんと決められていない状態でお殿様が亡くなった場合、その家は絶えてなくなるといふルールでした。ですから、本来なら竹谷松平家は忠清の代でおしまいになってしまふところでした。しかし、

400年前、松平清昌、お殿様になる

忠清の母が徳川家康の異父妹であったこと、竹谷松平氏が徳川家の分家筋にあたる家柄であったことなどから、忠清の弟の清昌が跡目を継ぐことを認められました。

松平清昌は、深溝松平氏の松平忠利が治めていたお隣の深溝藩から東半分(他は現在の幸田町)を受け継ぐ形で、この年の11月に5000石のお殿様になりました。支配地を記した「知行目録」からは、清昌が三谷・牧山(現在の豊岡)・坂本・水竹・清田・不相こい(現在の府相・小江)・西迫・蒲形(現在の蒲形総代区あたり)・五井・平田を治めていたことがわかります。西迫だけ他の村から離れていたたり、新井形がすっぽり抜けていたりしますが、石高が合計5000石になるよう調整したのでしょう。

竹谷松平氏が治めていた3万石の吉田藩は、清昌と交代するよう深溝松平氏の松平忠利がお殿様になりました。



兄・忠清(左)と弟・清昌(右)
「松平家歴代画像」の一部
天桂院 蔵